

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02495

研究課題名(和文) 『白鯨』の発生論的研究ー「流動的テキスト(fluid text)」を射程として

研究課題名(英文) Examining Moby-Dick as Fluid Text: A Case of Genetic Study

研究代表者

竹内 勝徳 (Takeuchi, Katsunori)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：40253918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は単著『メルヴィル文学における<演技する主体>』(小鳥遊書房、2020年)において示すことができた。本研究で調査したホーソーンとの身体的関係性や、主体に憑依するように現れる他者の魂、音声表現や音楽的な声による身体的な結びつきを具現した語り手やキャラクターを、本書において<演技する主体>と定義している。背後に別の何かが見え隠れする語り手やキャラクターを<演技する主体>として特定し、それによってテキストがハイブリッド化し、fluid textとして機能する諸相を考察することができた。<演技する主体>は、そのハイブリッド性によって、時代のイデオロギーに対して解体を迫った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メルヴィル研究において発生論的研究はあまりかえりみられていなかったが、執筆過程を分析することで、その創作法が解明され、それによってキャラクターの特徴やテキストの特性が明らかにすることができた。テキストの流動性とは、読者の側の生成作用というだけでなく、作家自身の中で他者との関わりや時代精神との対話を通して形成されるものであり、それがそのままキャラクターや語り手の向こうに透けて見えるようになるのである。この研究法は、資料収集の難易度にもよるが、他の作家研究にも応用できるものである。その意味では、メルヴィル研究と文学研究に、学術的なフォーマットを一つ提供できたのではないかと思う。

研究成果の概要(英文)：I published The Performing Subject in Herman Melville's Works: Literary Creation as Spiritual / Textual Resurrection as a total outcome of this study project. This book shows that characters' musical expression and equivocal connectedness through physicality whose historical vicissitude were identified by the genetic study of Moby-Dick are embodied in the figures of "the performing subject." It is a narrator or a character behind whose existence there is something other than and even conflicting with him / herself. This enables Moby-Dick and any other texts of Melville to work, as "fluid text," with intense hybridity. "The performing subject" had a potential of subverting various ideologies involved in the nineteenth century American democracy.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ハーマン・メルヴィル ナサニエル・ホーソーン 『白鯨』 発生論的研究 fluid text

1. 研究開始当初の背景

文学作品がいかなる背景において、どのような順序で執筆されたかを特定する研究法は、「発生論的研究」(genetic study)と呼ばれる。『白鯨』の原稿は火事で焼失したためこの研究の対象となってきた。古くは1949年にハワード・ヴィンセントによる書簡資料の調査が『白鯨』が二つの部分から成ることを論証し、1954年にジョージ・R・スチュアートは伝記的事実とテキストとを照合して、この作品が3段階で執筆されたことを主張した。1970年代に入り、ジェイムズ・パプアーは作品内に記された日付や外部資料の入手時期を手がかりに、「鯨学」の章の執筆時期を特定した。さらに、ハリソン・ヘイフォードは作品全体を徹底的に読み解き、登場人物やシーンが相互に入れ替え可能である構造に着目し、1850年時点での原稿における登場人物が1851年に入ってその記述を残し、名前だけ書き換えられたとする衝撃的な学説を提示した。『白鯨』にはエイハブという主人公やクィークェグという特徴的な人物が登場するが、彼らは1850年時点では存在せず、別の登場人物(ヴァルキントンやピーレグ)がその記述の主体として描かれていたというのである。

ヘイフォードの説は衝撃的であったが、その根拠は弱く、彼自身自分の説を「仮説」と呼んでいた。拙論「“Clap Eye on” Captain Pe(g)leg/ Ahab メルヴィルによる『白鯨』の原稿修正と反ナショナリズムの衝動」(『アメリカ文学研究』2009年)は、ピーレグ号の船主ピーレグのイシューメールに対するセリフ「エイハブをよく見てみる」(“Clap eye on Ahab”)の語法を検証することで、1850年時点ではこれが自分の義足を指し示すセリフ(“Clap eye on Pegleg”)であったことを証明した。つまり、ピーレグはエイハブの原型として、当初の原稿に片足の船長として登場していたということである。これによってヘイフォードの説の一部が証明された。

しかし、既に1990年代には、ローリー・ロバートソン・ローラントが、メルヴィルとホーソンは上述の研究者たちが考える程度の関係にはなく、互いの作品の原作者になるほどの深い間柄であったことを提起していた。ホーソンとの出会いによってメルヴィルが原稿の書き直しを決意したとすれば、これまでの「発生論的研究」はこの二人の関係の点検を軸として再構築されなければならない。

さらに、2014年にはジョン・ブライアントによる「傷、獣、推敲 メルヴィル・ミームの改定」が発表され、「発生論的研究」の展望が大きく変わった。ブライアントは情報遺伝学とも言えるミーム論に基づき、原稿の修正から翻訳、映画、劇作、マンガ等へのアダプテーションまで、テキストのあらゆるヴァージョンを視野に入れて「流動的テキスト(fluid text)」の諸相を研究すべきであると述べている。その総体として文学テキストが成立するというのだ。しかも、その根底には作者のトラウマや無意識における関係性が横たわっているという。『白鯨』はミーム(情報遺伝子)の働きにより、既に執筆された時点で「流動的テキスト」の様相を呈していたということであり、それ自体のアダプテーションとなっていたということになる。ブライアントは、版によって異なる表現や、翻訳における表現の違い、さらには各アダプテーションにおける表現までを電子化して、相互参照可能なアーカイブを構築すると明言している。

2. 研究の目的

こうした学術的背景に鑑みて指摘できることは、「流動的テキスト」という新たなアプローチによって『白鯨』の発生論的研究を実践し、その執筆過程を明らかにするのみならず、複数の層によって構成されるテキストの流動性に着眼すべき局面に来ているということ。そして、それを実践するうえで、ローラントが示唆したように、ホーソンとの関係性を重視しなくてはならないということである。特に、ブライアントは『白鯨』の翻訳を中心にアーカイブを作成しているため、その執筆過程に注目してテキストの流動性を考えることは先駆的な研究となる。

以上の点を踏まえ、本研究は以下の目的を達成するものとした。(1)ホーソンとメルヴィルの対話やそれによる二人の文学創作の変容、さらには同時期に書かれたそれぞれの作品の呼応点を掘り起こすことで、『白鯨』の各章にみられる年代ごとの特色を明確化して、その執筆過程を解明する。その際、両作家の身体論的、音声論的な意識の違いに着目する。(2)『白鯨』のテキストを分析し、執筆時期による身体論的あるいは音声論的な発想の違いを明確化すると共に、それらがハイブリッドな形で組み合わせられることで、いかなる「流動的テキスト」が構成されるのかを検証する。(3)『白鯨』のハイブリッドなテキスト構成を前提にして、『白鯨』の前後に発表されたホーソンとメルヴィルの作品を再検討し、それらの作品を相互参照的な一つの「流動的テキスト」として位置づけることで、彼らの文学に新たな光をあてる。

3. 研究の方法

ステージ1(2016年)では、まず、アメリカン・ルネサンスの文化的背景を捉えたうえで、ホーソンとメルヴィルの全作品について、言語的意味、音声、身体の見方から読み解いた。この時代がアメリカ・ロマン主義の文脈で語られることが多く、実際、作家たちは魂の永遠性や身体に対する精神の優位について語っているように思われている。しかし、この時代の 대중文化や思潮の変化に目を向けるとき、そうした言説が必ずしも直接的に魂や精神の優位について語っているとは言えないということが分かってくる。例えば、スピリチュアリズムの流行やスウェーデンボルグ思想の影響、メスマリズムの大衆化に伴い、人間の魂が身体から抜け出て他の体に憑依するパターンが文学作品に取り入れられてきた。これはデイヴィッド・レノルズが『ホイットマン

のアメリカ』(1996)において詳細に述べたことであるが、その指摘を待つまでもなく、メルヴィルの『マーディ』やホーソーンの「ドラウンの木彫」「美の芸術家」『ブライズデイル・ロマンス』などでそうした場面が容易に読み取れる。

そんな中、ホーソーンは1841年、自分の妻となるソフィア・ピーボディが女性催眠術師と面会し、魂の憑依体験についてホーソーンに手紙を書く。ホーソーンはそれが「精神的なものではなく、身体的、物質的影響」によるものとして強い嫌悪感を示した。この出来事からは、精神的な要素に対して身体的要素を下位に置こうとしながら、その存在感を消しきれないホーソーンの状態が読み取れる。ここから、ホーソーンは、身体的接触と近い経験としての音そのものへの反応を、精神的な作用としての言語的意味作用の下位に置くようになったと考えられる。

一方、セイレムやボストン周辺で暮らしたホーソーンと違い、メルヴィルはニューヨークでの在任期間が長く、バーナムのアメリカン・ミュージアムの展示物や見世物ショーに親しんでいた。例えば、『ホワイト・ジャケット』にはキューティクルという医師が登場し、人間の身体を切断するシーンが展開する。これは、当時バーナムのミュージアムで演じられていたフリーク・ショーの再現である。また、南太平洋での文化体験を経た彼は、言語的意味が分からないにも拘らず、音声の響きやニュアンス、入れ墨などの身体装飾、さらには、宗教的儀式としての死体の安置などから、身体や音の響きからくるプリミティブな関係性に開眼していったと考えられる。

以上の観点から、ステージ1では、ホーソーンとメルヴィルにとっての共通課題一言語的意味、音声、身体について、時代背景や大衆文化、伝記的事実などを勘案しながら、その全作品を点検することで、共通課題の各要素が『白鯨』の執筆過程を分析する視点や基準になることを確認した。この際、各作品において言語的意味、音声、身体が、語り手からの評価や物語内の位置づけによって、どのようなレトリックで表現されているかに注意した。また、特に、メルヴィルの作品においては、『マーディ』や『ホワイト・ジャケット』などに詩心のある人物が頻りに登場するので、その音声や音楽的表現がどのように描写されているのかに注意した。理論的にはエリザベラ・グロスツやレオ・ベルサーニ、アルフォンソ・リングスらの身体論、並びに、ジャスティン・マリソンやジェイン・スレイルキルらによる19世紀医学と疑似科学の分析を参考にした。

ステージ2(2017年)では、『白鯨』の各章を語り中心、音声中心、身体的接触、オラトリオ形式に分類し、主に について音声表現や身体接触がどのような位置づけになっているのかを明らかにした。この際、この作品が実は、海上の鯨肉解体工場としてのピークオード号を描いていることに注目した。これまで論じられていないが、この作品の61章から96章は、上述のフリーク・ショーと同じく、鯨の身体を原型をとどめないほどに切断して、それを鯨油へと精製していく過程を描いている。そして、語り手のイシュメールは切断された部位の組織や肌触りまでも綿密に描写していく。つまり、これらの章はまさに身体的接触のあり方について書かれた章なのである。また、これらの章は、言うまでもなく鯨の死体と延々と向き合う場面でもある。語り手や読者の意識は、決してモノとしての身体を言語的・象徴的レベルで捉えず、ただ触覚や肌触り、重力、浮力の対象としての身体と向き合う形になる。このことを踏まえて、『白鯨』の全章を細分化して からの要素に分類し、加えて、 に該当する部分について、それを描く形容詞の性質を分析すると共に、歌唱度を測定した。

ステージ3(2018年、2019年)では、以上の調査結果を踏まえて、ホーソーンとメルヴィルの関係を1850年から1852年の作品群に限って詳細に読み取った。例えば、『ピエール』では、ギターを奏でるが、言語的意味作用では自分を表現できないイザベルという人物が登場する。これは上述の音声表現とそれに対する否定をキャラクター化した例であるとも言えるだろう。併せて、ホーソーン作品にも、メルヴィルの変容に対して呼応するような表現を読み取った。例えば、『ブライズデイル・ロマンス』にはクリフォードという音楽には敏感だが小説を読むのは苦手という人物が登場するが、これはホーソーン版のイザベルである。以上のように、『白鯨』の執筆過程をホーソーンとの影響関係に基づいて読み取っていくことで、その他の作品における相互参照性が明らかになり、両者一体となった「流動的テキスト」の相貌が明らかになった。

4. 研究成果

本研究の成果は単著『メルヴィル文学における<演技する主体>』(小鳥遊書房、2020年)において示すことができた。本研究で言うホーソーンとの間の身体的関係性や、主体に憑依するように現れる他者の魂、音声表現や音楽的な声による身体的な結びつきを具現した語り手やキャラクターを、本書では<演技する主体>と定義している。本書は3部構成となっているが、まず第一部では『白鯨』を集中的に論じている。第一章「演技的空間としての『白鯨』」では、短編「二つの教会堂」のテキスト構造と比較する形で『白鯨』の中に劇場的空間性を読み取り、エイハブをはじめとするキャラクターたちを<演技の主体>として解釈している。第二章「“Clap eye on” Captain Pe(g)leg/Ahab メルヴィルによる『白鯨』の原稿修正と反ナショナリズムの衝動」では、メルヴィルの執筆過程とその時間軸の推移を分析し、<演技の主体>に見られる他者性やその延長としての交換性をキャラクター造型に読み取った。つまり、語り手やキャラクターが<演技の主体>として登場するのみならず、作者であるメルヴィルが自分のキャラクターを<演技の主体>とみなし、その背後に別のキャラクターを読み取るようにして創作した過程を明らかにした。彼のキャラクターが他者性や交換性を前提としたハイブリッドな構築物であることを論じた。第三章「エイハブの脚 『白鯨』の身体論的解釈」では、第二章での議論を援用

し、<演技的主体>である『白鯨』のキャラクターに見られる身体の拡張性について論じた。ここにおいてホーソンとメルヴィルの身体性に関する違いが明確化できた。第四章「声と音楽『タイピー』から『ビリー・バッド』まで」は、キャラクターの声や音楽的な表現に注目し、<演技的主体>が文化を超えていかに他者と結びつく主体となるかを考えると共に、それが身体を中心とした関係性によって成り立つものであることを明らかにした。また、<演技的主体>のあり方が『ピエール』以降、ホーソンとの関わりの影響で大きく変容していく状況とその理由について論じた。

第二部以降では、本研究でメルヴィルとホーソンの作品全てを読み直したことから、『白鯨』以外の作品にも言及した。『タイピー』、『オム』(一八四七年)、『レッドバーン』、『ホワイト・ジャケット』を取り上げ、<演技的主体>が構成されていくプロセスを明らかにした。第五章「『タイピー』における<演技的主体>」では、『タイピー』の主人公トンモの見る側の視点が、ときに見られる側に転換する点に注目し、それが『タイピー』のジャンルとされた海洋探索あるいは博物学的な記述に一種の違和感を生じさせ、彼をして観客に見られる<演技的主体>へと変化した点を考察した。第六章「トランスパシフィックな劇場的転回-『オム』について」は、作品で描かれるフランスやイギリスの植民地行動が、語り手とその仲間によって形式的に反復されることで、形骸化した虚構の産物になることを論証した。第七章「狂気の謳歌-『マーディ』と『白鯨』」では、<演技的主体>が立ち現れるときに見られる欲望の構造的性と、それを具現化したキャラクターとしてのエイハブ船長の姿を提起した。第八章「イデオロギーとの戦い-『レッドバーン』と『ホワイト・ジャケット』」では、<演技的主体>における過去と現在の関わりや、そこに介在する政治的イデオロギーとの関係について論じた。

第三部では、<演技的主体>、あるいは、<演技的主体>を造型する創作プロセスにおいて、十九世紀の政治的イデオロギーがいかにして解体されていくかを論じた。第九章「ホーソンとメルヴィル」では、本研究での調査を活かし、メルヴィルに重大な影響を与えたホーソンの芸術論と、それに対するメルヴィルの受け取り方のずれを検証した。第十章「『ピエール』における移民、創作、セクシュアリティ」では、イザベル・バンフォードに十九世紀中葉のヨーロッパ移民表象を読み取り、彼女が移民としての運命を背負いながら、しかし、主人公ピエールをその音楽的なコミュニケーションの中に巻き込むことによって、世襲制が支配する大土地所有を崩壊に導くプロセスを探った。第十一章「迫り来る壁、憑依する魂-「バートルビー」と「ベニト・セレノ」」では、<演技的主体>のあり方が大きく反転した状況、すなわち、<演技的主体>が求める身体的な同一化を不可能にする社会状況と、それによって失われた人間性に焦点を当てた。第十二章「ナラティブの向こうへ-『イズラエル・ポッター』における独立戦争」では、アメリカの独立革命が神話化される中で、メキシコ戦争を独立戦争の再演として位置付ける風潮に対して、同じく独立戦争を扱った『イズラエル・ポッター』がいかにして独立戦争神話を書き換えていったかを、『ビリー・バッド』において言及される「インサイド・ナラティブ」の概念を使って読み解いた。第十三章「劇場の詩学-『信用詐欺師』とタマニー・ホール」では、<演技的主体>が現れる文化的コンテクストとしてのニューヨークの政治動向、並びに、それと連動した劇場文化のあり方に注目し、『信用詐欺師』における<演技的主体>がそうした状況でいかなる演技的構造を作り上げているかを論じた。第十四章「『クラレル』におけるシオニズムと時間の超越」は、メルヴィルの隠れた大作『クラレル』における儀式的な場面を、<演技的主体>が立ち上がる場として位置付け、それを当時盛んであったシオニズムの動きと対置して捉えた。そして、第十五章「『ビリー・バッド』とショーペンハウアー」では、メルヴィルが晩年に読んだアルトゥール・ショーペンハウアーの著作を参考に、『ビリー・バッド』における美の概念と芸術的共同体の行方を探った。

以上、メルヴィル文学における発生論的研究から、語り手やキャラクターの背後に別の何かが見え隠れするメルヴィルの根本的な創作法を特定し、それによってテキストがハイブリッド化し、fluid text として機能する諸相を考察することができた。そうしたキャラクター、本書の用語で言えば、<演技する主体>は、音声表現や音楽的な声で特徴付けられ、それゆえに他者と身体的に結びつく特徴を有していた。この点も本研究の調査によって裏付けてきたものである。また、こうした創作法を基盤として、『白鯨』やメルヴィル作品が時代の政治的コンテクストや資本主義の展開との激しい反発や共鳴を示している点を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹内勝徳	4. 巻 4
2. 論文標題 情動の創造性---アフェクト理論による『白鯨』分析	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 スカイホーク	6. 最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 竹内勝徳
2. 発表標題 「『信用詐欺師』におけるホームランドとネイティヴィズム」
3. 学会等名 ホームランドの政治学 アメリカ文学における帰属と越境の力学に関する研究公開ワークショップ
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内勝徳、横田正夫、庄司宏子、新田啓子
2. 発表標題 シンポジウム文学 / 映像における〈情動〉の再定位
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Katsunori Takeuchi
2. 発表標題 Two Godzillas: Transpacific Movements and Cultural Deterritorialization
3. 学会等名 International Paper Presentation on Japanese and Filipino Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 竹内勝徳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 271-287
3. 書名 「劇場文化の政治学 「二つの教会堂」を通して読み解く『信用詐欺師』」倉橋洋子・高尾直知・竹野富美子・城戸光世編著 『繋がりの詩学 近代アメリカの知的独立と<知のコミュニティ>の形成』	

1. 著者名 竹内勝徳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開文社	5. 総ページ数 85-122
3. 書名 「『イノセント・アプロード』にみる虚構のホームランド」小谷耕二編 『ホームランドの政治学 アメリカ文学における帰属と越境』	

1. 著者名 竹内勝徳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 75-99
3. 書名 「トランスアトランティックな遊行とエコロジカルな再生ーメルヴィルの小説におけるアメリカ独立革命」川津雅江・吉川朗子編 『トランスアトランティック・エコロジー』	

1. 著者名 竹内勝徳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 446
3. 書名 メルヴィル文学における<演技する主体>	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----